

## 博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	久保 昌子		
論文題目	養護教諭の職務の特性に関する研究 ～多様な職務の理解をめざして～		
論文審査担当者	主 査	広瀬雄彦	㊟
	審査委員	箱田裕司	㊟
	審査委員	谷川至孝	㊟
	審査委員	森下正康	㊟

養護教諭の職務は、明治時代にその前身である学校看護婦が誕生して以降、多様化の一途を辿ってきた。本論文は、時代とともに多様化する養護教諭の職務について、その多様化の道筋を歴史的に展望することから始め、その多様化した職務を養護教諭と関わる児童生徒、学校関係者、養護教諭自身がどのように捉えているのかを、養護教諭やその職務に対する印象、養護教諭に期待する職務、養護教諭の感じる職務への負担感や自信、養護教諭による自らの職務の自己評価と役割意識についての調査研究から明らかにし、養護教諭の職務の理解の枠組みを示すとともに、その職務の特性について考察したものである。

第1章では、学校看護婦として誕生した当時から現在までの、養護教諭の職務の制度的側面、実践的側面、及び養成課程における歴史的変遷について整理し、職務が多様化した経緯と養護教諭の職務の特殊性について明らかにしている。また、これまで行われてきた養護教諭の職務に関する研究についても概観しており、次の2点を指摘した。第1の点は、養護教諭の職務を捉える枠組みが存在しないことであり、第2の点は「養護をつかさどる」と表現されるその職務内容自体が極めて曖昧なことであった。

第2章では、まず、かつて在籍していた小学校、中学校及び高等学校における養護教諭に対する印象及び職務の理解に関する調査を行っている。その結果、「健康診断」「救急処置」「個別の対応」といった職務が養護教諭の重要な職務であると理解されていること明らかにしている。次に、管理的立場の教諭や一般教諭が養護教諭に対して抱いている役割期待と養護教諭の役割意識について調査を行っている。その結果からは、管理的立場の教諭や一般教諭からの役割期待と養護教諭の役割意識のいずれともが高かったのは、「救急処置の判断と対応」であった。また、チーム支援に関して管理的立場の教諭や一般教諭からの役割期待と養護教諭の役割意識のいずれともが高かったのは「特別支援教育と心の相談への支援」であった。一方、これら以外の職務については、すべて管理的立場の教諭の期待がもっとも高く、次いで一般教諭の期待であり、養護教諭の役割意識は他の教諭からの役割期待より低いことを明らかにした。

第3章では、まず、養護教諭の職務に対する意識を負担感と自信という視点から調査している。

結果より、負担感については次の 5 点が明らかになった。1)すべての勤務年数、学校種、学校規模の養護教諭においても「ルーティンの仕事」の負担感が最も高く、「集団への対応と健康教育」の負担感は最も低い。2)「個別の対応」の負担感は勤務年数が 1～5 年の養護教諭が最も低い。3)「集団への対応と健康教育」はすべての勤務年数において負担感が低い。4)中学校や高等学校では「個別の対応」の負担感が高い。5)大規模校では「ルーティンの仕事」の負担感が高い。一方、自信については次の 4 点が明らかとなった。1)すべての勤務年数、学校種、学校規模において「ルーティンの仕事」への自信が最も高く、「集団への対応と健康教育」への自信は最も低かった。2)勤務年数の増加に伴って自信は高くなる。3)中学校と高等学校では「ルーティンの仕事」と「個別の対応」への自信が同程度に高い 4)中規模校では「ルーティンの仕事」と「個別の対応」への自信が同程度に高い。

次に、養護教諭の職務に対する意識を、職務における役割をどの程度果たしているかという自己評価と、それぞれの職務に対して他の教諭からの期待をどの程度意識しているかという役割意識の視点から調査している。結果より、自己評価に関しては勤務年数 31 年以上が最も高く、11～20 年は低かった。また、役割意識については、「救急処置と保険管理」及び「健康課題の把握と対策」についての役割意識はすべての勤務年数において同程度の高さであった。自己評価と役割意識との差が勤務年数 31 年以上において僅少となった。さらに、これらの結果を一般教諭における職務の自己診断について調査した岸本・岡東・林・小山(1981)(注)の結果と比較したところ、48～52 歳以降に興味深い相違が認められた。具体的には、養護教諭はすべての職務内容に関して自己評価が大きく上昇するのに対して、一般教諭では男性で横ばい、女性では低下していることであった。

終章の第 4 章では、まず第 2 章及び第 3 章における諸調査の因子分析結果に基づいて、養護教諭の職務の分類を試み、3 観点による分類を提案している。1 つめの観点は「ルーティンの仕事」であり、救急処置・救急体制、健康診断・保健行事、事務処理などが含まれる。2 つめの観点は「個別の対応」であり、心の相談、保健室登校の児童生徒への対応、特別支援教育の必要な児童生徒への支援、保健指導（個別）などが含まれる。3 つめの観点は「集団への対応と健康教育」であり、環境衛生活動、地域や関係機関との連携、学校安全・危機管理、校内組織活動、児童・生徒委員会活動、保健学習、感染症予防、保健指導（集団）などが含まれる。次にこれら 3 観点をを用いて第 2 章及び第 3 章における諸調査の結果を再度考察している。具体的には、1)小学校、中学校、高等学校で養護教諭と接してきた大学生、一般教諭、管理的立場の教諭、それぞれから捉えた養護教諭の職務、2)管理的立場の教諭や一般教諭からの期待と養護教諭の役割意識とのずれ、3)養護教諭の職務についての役割意識及び自己評価と勤務年数との関係や一般教諭との比較、である。

養護教諭の職務に対する期待は、20 年ほど前までは過小といえるものであったが、それが現在では逆に過大と呼ぶことができるまでに変化したことを指摘し、また管理的立場の教諭ですら十分に理解できていない養護教諭の職務の分類に 3 観点による分類を用いることの意義について最後に述べている。

(注)岸本幸次郎・岡東壽隆・林孝・小山悦司(1981). 教師の職能モデル構築に関する研究〔II〕－教職能力をめぐる因子分析的考察－ 広島大学教育学部紀要 第 1 部, 30, 119-129.



